

RS

Ritsumeikan Style SPECIAL ISSUE
学園通信 Dynamic Academic 2011

教員からの講評をつけた作品集を作成し、個別返却の際に同封しています。さらに、2011年度からは、入学予定の専攻・プログラムごとに課題を設定し、TAおよび教員による丁寧な指導を行ってきました。

文学部では、学生を社会に送り出す大学の役割として、進路・就職支援は教学と一体のものであるという理念から、1回生から正課授業内外での学生の自己実現に向けたキャリア形成支援を推進してきました。まず、入学当初のオリエンテーションにおいて、文学部校友会の協力のもと、OB・OGを招いて、文学部での「学び」と広義の「キャリア」のあり方について、考える機会を設けました。「リテラシー入門」では、就職活動を行った4回生と懇談し、「キャリア発達論」では、文学部教員がリレー形式で自身の青年期から成人期にかけてのエピソードを紹介し、受講生のキャリア形成を促しました。また、2011年度より、「未来を拓く」をリテラシー入門で活用し、より充実した支援を行う予定です。

現在もなお長引く経済不況により、就職については大変厳しい状況が続いています。そうした中ではありますが、イノベーション副専攻は、現代社会のニーズに応える科目群を用意し、過年度における2回生の受講率が約2割に達するなど多くの受講生を集めています。「ツーリズム・コース」の受講生では、2009・2010年度卒業生の旅行業・観光業への進出率(23.6%)が、文学部全体(2.3%)を大きく上回る結果となっています。同じく「デジタルグラフィック・コース」の受講生では、民間企業へ就職した学生の30%がIT関連分野に進んでいます。また、文学部では教員志望の学生が比較的多いのが特徴となっています。2010年度も教員採用者が文学部現役で28名と大学全体の約28.6%を占めます。教員採用試験合格者では現役、既卒、大学院を含めて54名に及んでいます。

このように、文学部の取り組んできた所属専攻・プログラムを超えた総合的・学際的な学びを修めた学生が、文学部の就職を牽引している状況にあると言えます。

文学部の大学院進学者(他大学への進学も含む)についても、2007年度以降、毎年

120名を超えており、卒業生の10人に1人は、大学院で研究を続ける状況にあります。2007年度から導入された、「大学院進学プログラム」は、4回生時から大学院科目を受講でき、大学院進学の1つのかたちとして定着してきました。

IV 今後の学部教学の方向性

1 専攻を束ねる「学域」誕生 8学域18専攻へ

2012年に85周年を迎える文学部は、「学域」という教学区分を設け、1927年の創設以来、最大となる改革を実施します。現行の15専攻・プログラムから、8学域18専攻に改編し、日本文化情報学専攻、考古学・文化遺産専攻、現代東アジア言語・文化専攻、地域観光学専攻といった現代社会のニーズに応える「専攻」を新設します。学域・専攻制度は、これまで推進してきた文学部の教学の学際化・総合化・国際化を進展させ、あわせて人文総合科学インスティテュートの理念を継承するものです。

複数の「専攻」から成る「学域」は、高校からの学びを大学につなぐ基礎力やリテラシーを幅広い視野から身につけ、さまざまな人文学を融合して学ぶことができる、他大学では類例のない未来型人文学を創造する(場)として設けられたものです。学域での切磋琢磨を通じて2回生以降に選択する専攻では、伝統的人文学の継興(学問・技芸などの最も奥深いところ)を、時間をかけてじっくり学んでいくこととなります。

2 初年次教育の充実

学域・専攻制度では、特に新入生の大学生活への移行を円滑に進める観点から、初年次教育に力を入れる予定です。学生が自身の適性を選択するのに相応しい初年次教育として、従来のインフォメーションスキル、ライティングスキルおよびキャリアスキルに加

え、自己管理や学習習慣といったスケジュールスキルの涵養を意図した授業を設計しています。それら4つのスキルを涵養する授業は、これまで半期であった授業を通年化した「リテラシー入門」で行います。リテラシー入門の授業は一部を除いて小集団教育となります。一方、初年次専門科目の「研究入門」はすべて小集団教育で、アカデミックスキルを磨きます。研究入門は学域別の授業です。

3 学部教学の更なる国際化への推進

学部の国際化を牽引する専攻として、コミュニケーション学域に「国際コミュニケーション専攻」を設置しました。国際コミュニケーション専攻は国際インスティテュート(文学部においては国際プログラム)の後継展開という性格もあり、より高度な英語教育を準備します。そのほか、外国語科目の体系的かつ系統履修のために、英語I~VIIIと初修外国語(基礎・表現・展開・応用)に続いて回生が上がってもシームレスに履修できる「専門外国語」を新設します。

そのほか新たに国際文化学域が誕生します。当学域の学生は、英米文学専攻、西洋史学専攻、文化芸術専攻を選択できます。さらに、「国際」という名称は冠しておりませんが、東洋研究学域は激動する東アジア情勢を見据えた国際的な学域であり、学生は中国文学専攻、東洋史学専攻、現代東アジア言語・文化専攻を選択できます。また、学域もそれぞれ国際化を推進しています。



人間と文明・文化の本質を見極め、新しい「知」と「価値」を創造する

I 現代と文学部の使命

2011年3月11日に起きた東日本大震災及びその後の原発災害は、日本のみならず人間自体のこれからのあり方を根底から問いかけるものとなりました。人間が自然の脅威にさらされながら生命を育む存在であることがあらためて明らかとなり、これまで営々と積み上げてきた文明・文化のあり方も問い直されています。21世紀に入ってから、グローバル化とIT革命は飛躍的に進展し、科学技術の発達が明るい未来を約束しているかのように見えた矢先に、この大震災は、わたくしたちにもう一度原点に立ち返って考えることを求めています。

一方、この大震災は、人間の絆の大切さ、協力して立ち上がることの尊さ、自然と共生していくことの重要さなども教えています。人間は、自然の中で、そして繋がりの中で、互いを気づかいながら生きていく存在であることを、わたしたちは被災者の方々の懸命に立ち上がろうとする姿から、そして国際的に広がった支援の輪から学ぶことができたと思います。

文学部は、人間について、根底から考える学部です。人間とは何か、いかに生きていくべきかについては、はるか人類の発生に遡って見つけ、人間が築いてきた全世界の文明・文



化を反省的に捉え返し、人間が残してきた言語的作品をじっくりと吟味しながら考えていく学部です。その意味では、まさに人間自体のあり方が根底から問い直されている現代世界にあって、文学部の役割はますます重要になっています。人間研究・日本研究・国際研究・言語研究などを通じて、数千年に及ぶ人間の英知と誤謬から現代が学ぶべきことがらを的確に抽出し、人間の未来の方向性を示すことが文学部の使命であり、そのことによって現代世界に貢献していきたいと、文学部では考えています。

II 文学部が目指す教育

上述した文学部の使命を実践するために、文学部は「人間と世界のさまざまな文化について、幅広い知識と豊かな表現力を身につけ、人間と社会が抱える問題を解決しようとする人間を育成する」ことを「人材育成目標」に掲げています。この目標の達成のために、全回生に小集団教育科目(少人数ゼミ)を設置し、教員・学生・TA(ティーチング・アシスタント)が協力し合って、読解力、問題発見力、調査分析力、思考力、表現力といった学問力を系統的に養い、主体的に問題を解決・行動する人材を育成していきたいと考えています。このほか、自分の専門性の幅を広げるために、他専攻の専門科目を履修できるカリキュラム、専攻横断的学びをできる副専攻やテーマリサーチ型ゼミナール、国際的視点を身につける海外研修プログラムも用意しています。

これらを集大成しての卒業基準=学士力を明確にするために、文学部ではこれまで一貫して卒業論文・卒業制作を必修としてきました。卒業論文の執筆・完成とそれに関わる試験

(試問)の合格こそが、文学部での学修の最終目標であり、優れた卒業論文を執筆できる人材を社会に送り出すことによって現代社会の求める「知」と「価値」の創造を担っていくことが、文学部の教育目的です。

III 文学部におけるこの4年間の取り組み

1 学部教学の重点化のポイント

1994年以降の文学部教学の第一の重点は、専門教育の高度化と専攻横断型教育の開発・充実にあったといえるでしょう。前者については、戦後に発展した新しい人文学の摂取・充実として、後者については専攻横断型のカリキュラム・ゼミナール・副専攻の構築として結実し、大きな成果を挙げてきたと考えられます。これらの集大成として、後述するように2012年度からは「学域専攻制」への改組が実施される予定です。

第二の重点としては国際化があげられます。エリアスタディ副専攻を2007年度に新設したほか、海外留学プログラムや日韓中連携プログラムの充実にも努めてきました。また、国際プログラムをはじめ英語アドヴァンスト・コースにおいて、英語で人文学を学ぶ力の育成にも取り組み始めています。

第三の重点としては、高校までの学びを大学の学修に確実につなげる初年次教育の充実と、「なりたい自分」を実現して就職につなげていくキャリア教育の展開があげられます。リテラシー入門では、両者を組み込んだカリキュラムが生まれ、クラス別のキャリア懇談会も実施しました。

R 立命館大学
RITSUMEIKAN

立命館大学学園通信 Ritsumeikan Style 2011年度全学協議会特別号

2011年6月13日 発行：立命館大学広報課

〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1 電話075-813-8146

(1) 4年間の学びの体系化

文学部では、人材育成目標にもとづき、いわゆる3つのポリシー（アドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー）を制定したうえで、「カリキュラムマップ」を作成しました。また、専攻・プログラムごとに履修の仕組みが異なることから、文学部全体の「履修要項」とあわせて専攻・プログラムごとの「教学の手引き」を作成しています。2008年度より学部全体の学びの構造がわかるよう、文学部全体の学びの俯瞰的なものとして「文学部における学びの流れ」を履修要項に掲載しました。

一方、「教学の手引き」についても、各専攻・プログラムごとの「人材育成目標」を明示するとともに、主要専門科目を含む4年間の「履修の仕方」や「履修モデル」をはじめ、「科目概要」を作成しました。特に科目概要を作成することにより、各科目について、担当者や年度に関わらず変わらない基本的な目的や内容を示すことができました。このように「履修要項」と「教学の手引き」を刷新することにより、文学部の4年間の学びを体系的に分かりやすく提示しました。今後は、これらの手引きとあわせて2010年度に制定した文学部のカリキュラムマップと学域専攻別の教育研究上の目的の精緻化を図っていく予定です。

(2) 徹底した小集団教育と初年次教育

文学部では、従来から小集団教育を重視し、全回生にゼミを配置してきました。ゼミの学びを通して、基礎学力を養い、人間的に成長しながら学びを深め、4年間の集大成として、卒業論文・卒業制作を仕上げます。文学部は、卒業時の質保証を担保する仕組みとして、卒業論文・卒業制作の必修化にいち早く取り組んできました。とりわけ、小集団授業のなかでも1回生時における教育を重視し、大学での学び全般についての適切な入門となる初年次教育に力を入れてきました。

具体的には、リテラシー入門の授業内容を刷新し、1回生時に必要な基礎的なライティング能力を身につけることを目標に、2009年度から共通の教科書（『人文学のリテラシー』）を作成のうえ、とりいれました。この教科書をもとに、受講生、担当者、TA、学部教員全員に配布し、学部共通のライティングに関する授業を実施しました。ライティング授業の運営は、教員間のFD（ファカルティ・デベロップメント）としての効果も見られました。

また、リテラシー入門は、レポート作成に必

要な情報スキルとして、新たにエクセルおよびパワーポイントの内容も加え、基本的なスキルを身につける科目として展開してきました。独自の授業アンケートも受講生に対して実施し、各項目の満足度は3.33～3.85（1～5の評価とし、数値が大きくなるほど満足度が高い）の結果が示され、概ね好評でした。このようにリテラシー入門は、卒業論文を到達点とした文学部教学の学びの体系の中で、初年次教育の主要な柱として、学部生全員に基礎的な文章作成能力を身につけるための重要な役割を果たしてきました。

なお、2回生向けの「アカデミック・ライティング」を開講し、リテラシー入門で培った文章作成能力を継続して高める取組みを進めています。今後は2012年度学部改革を見据えた初年次教育の再構築を目指します。

(3) コア科目の強化と試験講評の実施

2007年度全学協議会の教学課題の1つとして改めて確認されたコア化の課題に対して、2007年度以降、専攻・プログラムの専門科目におけるコア科目を明確化し、教学の手引きに明示してきました。コア科目を重視する観点から、2008年度より講義系コア科目（定期試験・レポート試験のみ）を対象にTAを配置し、文学部のHP上で試験講評を公開してきました。授業担当教員が作成した試験結果の講評を学生に示し、それを通して学生自身が到達度を確認し、知識の定着と次への学習意欲を高めるための取組みとして、教員と学生の一連のフィードバックの過程を定着させました。該当する科目は2008年度から毎年60教科目に及びます。

(4) テーマリサーチ型ゼミナールの充実

テーマリサーチ型ゼミナールは、現代社会のさまざまなテーマについて、人文学の分野・領域を横断しながら研究するスタイルをとってき

ました。文学部の専攻横断型教育の先駆的な取り組みとして実践し、多くの学生が学問の垣根を越えた学びを通じてお互いを刺激しあうことにより、新たな人文学の可能性を生み出してきました。例えば、2010年度においては、3回生に対して、「韓流映画を解析する」、「地中海世界の歴史と文化」、「京都のトリックデザインと心理学」など、18ゼミを開講してきました。3・4回生あわせて491名が履修するなど幅広い学びを支援するものとなりました。テーマリサーチ型ゼミナールは、所属専攻・プログラムでしっかりと学び、なおかつ他領域の学びにも積極的に取り組みたい意欲のある学生が、それぞれの専攻の学びを持ち寄り、学生間で相互の学び合いをしながらテーマを広げ、深めていくような成長の場でもあります。また、2009年度から卒業論文・成果物の評価の厳格化に取り組み、複数教員による審査体制の実行と、優秀論文・優秀作品の選出などの体制の強化を図りました。今後も、複数の専攻・プログラムの学生が、それぞれの専門を生かしながら参加できるようなテーマを設定して開講する予定です。

(5) 文学部副専攻の拡充

専攻教学の充実とともに、専攻横断型教育としてイノベーション・エリアスタディ両副専攻を充実させてきました。イノベーション副専攻では、高度な英語力、デジタル技術など、社会的ニーズの高いアドヴァンストスキルの獲得とキャリア形成に役立つ実践的な授業として新たなコースを開発してきました。2007年度に新たに観光をテーマにしたツーリズム・コースを新設し、2010年度には人文系デジタルグラフィック・コースを拡充し、デジタル人文学コースに再編しました。デジタル人文学とは、情報技術を用いた人文学のことで、画像処理、3次元CG、映像、テキスト処理、WEB技術、地理情報システム、デジタルアーカイブに関する基礎的かつ実践的な授

業を展開しています。エリアスタディ副専攻は、当該地域の総合的理解を深化させつつ、人文学的立場から新たな世界像・地域像の再構築をめざす地域研究として展開してきました。具体的な取組みについては、「4. 国際化の推進」で後述します。これら二つの副専攻を履修する学生数は、例年、2回生の20%近くに達しました。両副専攻の拡充は、文学部における専攻横断型教育を牽引してきました。

(6) 学生実態把握と教学改善

教育開発支援課との連携による「学びの実態調査」は2009年度から始まり、文学部も1回生の入学直後、新2回生（1回生後期の成績発表時）、新4回生（3回生後期の成績発表時）、および4回生の卒業時（卒業論文の口頭試問時、2010年度のみ）に調査を行いました。それらの教学データはそれぞれの項目における傾向の分析と教育を検証するとともに、専攻・プログラム別の比較や、入試方式別の比較を行い、教学改善に役立てています。それらは、2008年度から継続中の全専任教員参加のFD活動にも還元しています。さらに、2012年度からの文学部教学改革の効果を測るための基礎資料として比較・活用できるようデータの蓄積を進めています。そのほか、専攻・プログラム内の研究入門のクラス別差異がどの程度かを調べ、2012年度からは各学域における研究入門の教学内容の平準化に活用するとともに、改革前後の学びの実態に変化があるかどうかとも調べる予定です。

(7) ポートフォリオを活用した学びのサポート

文学部では、授業内外における学習成果物を蓄積する学習履歴管理システム（以下、ポートフォリオ）を2008年度より試験的に導入してきました。ポートフォリオは、教員からのレジュメや教材提示だけでなく、学生が作成したレポートやプレゼンテーション資料、論文等の成果物を蓄積でき、学生自身が自らの学びの歩みを客観的に振り返ることができます。学習目標や学びの成果を確認する学習ツールとしての効果を期待できることから、2010年度からは、文学部1回生の研究入門およびリテラシー入門の全クラスにおいて利用を開始し、入学時から小集団授業での学習指導に役立ててきました。今後はアンケート等による効果の検証と、他科目への拡大を図ることとします。

3 京都学プログラムおよび言語コミュニケーションプログラムの開設

文学部では、2009年度より人文総合科



学インスティテュートを再編し、現代社会のニーズに対応した新たな教学展開として、京都学プログラムと言語コミュニケーションプログラムを開設しました。この創造的再編は、文学部においてこれまで進めてきた人文学の学際化・総合化の理念を受け継ぐ改革でした。この再編を通じて、新たな京都学を構築し、日本文化を世界へ発信するとともに、ことばとコミュニケーションに関する学際的研究を進め、社会に貢献しうる人材の育成を目指しています。

4 国際化の推進

国際化への対応として、全学の多様な海外派遣プログラムの活用を一層すすめるとともに、エリアスタディ副専攻などの海外研修への参加を促進してきました。エリアスタディ副専攻では、2010年度からイタリアコースの海外実習として新たにトリノ大学文学部と協定を締結し、イタリア語学研修プログラムに22名の学生を派遣しました。また、英語アドヴァンスト・コースの実習先も見直し、新たにオレゴン大学と協定を締結しました。語学研修に加え、アメリカの文化や歴史を英語で学ぶこともできることから、北米コースのエリアスタディ実習としても位置づけ、学生を派遣してきました。

このような学部独自の国際化を進めるなかで、2007年度に262名だった海外派遣・留学者数が2010年度には285名にまで増加しました。なお、今後も学部の国際化を進めるためには、学生の英語力を向上させることが必要です。TOEIC®は、1回生の4月と12月の比較で、2009年度で平均58.6点、2010年度で44.8点向上することができました。一方、1回生、2回生の英語上位層へのTOEFL®の受験率及びスコアの向上をはかることで、留学・海外実習プログラムへの参加

を促進していきます。

また、留学生を受け入れる取り組みも進めてきました。アジアを拠点とする「日韓中連携プログラム」として、韓国の東西大学校と中国の広東語外貿大学との間で三大学の学生が交流するプログラムを継続的に実施し、韓国・中国の留学生を積極的に受け入れてきました。また、2010年度より、言語コミュニケーションプログラムでは、韓国の祥明大学校との間で、日本語教育をテーマに学生・教員を相互派遣し、文化交流を進める新たな取組みを進めてきました。今後も新たな海外の大学との交流拡大を図ります。

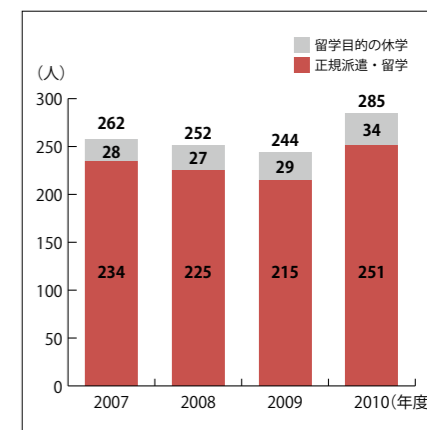


図1 海外派遣・留学者数（文学部）

5 入学前教育および進路・就職支援

文学部では、入学までのモチベーションを高め、高校から大学へ、学びの平滑なシフトを目指して、2008年度以降の特別入試による入学予定者（毎年約500名）を対象に、入学前教育として日本語ライティングを課してきました（提出率は、毎年90%を超える状況です）。提出された課題は、TAによる添削のうえ、文学部教員が点検をし、各自に返却を行います。また、優秀作品を10篇程度選定し、

注1：2010年度より「人文系デジタルグラフィック・コース」を改編。
注2：2009年度より京都学プログラムの教学として展開。